



Title	記憶と想像のゆらぎ : 余光中における郷土の位相
Author(s)	上田, 哲二
Citation	大阪大学言語文化学. 2003, 12, p. 253-263
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77962
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

記憶と想像のゆらぎ —余光中における郷土の位相—*

上田 哲二**

キーワード：台湾現代詩、余光中、郷土

Yu Guangzhong (1928-), a poet/essayist/translator/playwright, is one of the most accomplished writer in Taiwan. He was born in Nanjing and raised in the southern provinces in the mainland, before he moved to Taiwan where he became a founding member of the Blue Star Poetry Club. His lyrical style alternate from the occidental models to Chinese "neo-classicism," yet maintaining a consistently inspiring diction and appealing style. One of the well-known themes in his works include the nostalgic memories of his adolescence in the mainland, which has captured a wide-range of readers in Taiwan and overseas. Like many other mainland-born Chinese writers who came to Taiwan with the Nationalist Party, Yu's "homeland" became a distant imagined-community which is no longer existent. Yu's nostalgia toward his lost-homeland, a sense of local solidarity in Old China, memories of the landscapes in his youth, depicted in the multiple poetic styles and diction, has inspired a young generation of Taiwanese poets as well. What is, then, behind Yu's nostalgia toward the homeland?

This paper focuses upon the nature of this Yu's nostalgia appeared in his past works. The paper, in conclusion, explores the possible affinity of the historical Eastern sentiment of counter-modernism with Yu Guangzhong's fondness of pre-modern communities when the East was still maintaining the sense of universal validity of its own. It was the modern occidental powers who came to Asia to invalidate the Asian norms, and thus the recognition that the modern Asia would not ever be able to recover the once glorious days could very likely be lying in his nostalgia.

はじめに

詩人、散文家として著名な余光中（1928－）は戦後台湾詩壇の重鎮として知られる人

* The Swings between the Memories and the Imagination: On the Nature of Nostalgia in Yu Guangzhong's Works (UEDA Tetsuji)

** ** 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

である。¹⁾彼は九月九日の重陽の節句に生まれているが、母の孫秀君はその前日に古来の習慣に則り、長寿を願い災厄を除くために南京の棲霞山に登ったという。この暗示的なエピソードは本人自身が中国大陆への思いの深さを表すように、一九九九年に出版された伝記の序文に書いている。²⁾またその詩作品における主題として妻や家族への暖かな愛情、南部高雄の自然などもよく知られているが、その中心主題のひとつにやはり外省系作家として<家>、<郷土>への思いが挙げられることが多い。これまでの余光中研究にもその郷愁感に満ちた詩作品について分析したものは少なからず見られ、近年もたとえば、評論家の焦桐氏が余光中作品における中国的イメージの変遷について詳細な分析をおこなっている。³⁾

新詩の歴史は異邦体験による喪失した「郷土」への思いが、さまざまなかたちで関わっている。あるいは言いかえれば、個々の作家の異文化体験によって照射された自己を見つめ直す作業が創作へのはげみになったと考えられる。⁴⁾戦後、大陸から渡台した作家たちにとっても台湾への移動はいわば異邦体験であった。彼ら外省人作家たちにとって、<郷土>は地理的にも思想的にも遠く離れてしまった地である。余光中にとって郷愁の対象となっている事象はどのように描かれ、戦後の急速に進む近代化を生きる台湾知識人としてどのような思いがこめられているのかを本論で考察する。

1. 「郷愁」の多層性

余作品のうちでも有名な「郷愁四韻」における、「長江の水」、「赤いカイドウの花」、「白雪花」、「蠟梅」、といった鮮烈で視覚的イメージは豊かな連想を刺激する作品であり、評価も高い。詩集『蓮の聯想』における古典中国の風雅の美は、戦後台湾現代詩における新古典主義の嚆矢である。⁵⁾

古典文学においても、家郷をおもい作品にそれを反映させたものはけっして少なくな

¹⁾余光中は1928年9月9日、江蘇省南京の生まれ。幼年時南京にて過ごし、抗日戦争開始とともに各地を移動し、1940年南京青年会中学入学、47年卒業後、金陵大学外文(外国文学)系、厦門大学外文系にて学ぶ。その間、郭沫若、臧克家の詩に傾倒。1949年5月渡台。『新生報』、『中央日報』の副刊、『野風』雑誌等に詩作を発表。同年9月台湾大学外文系に入学。卒業後、1954年3月、賈子豪、鍾鼎文とともに、藍星詩社を創設。その作風は伝統、郷土意識、民歌の格調を色濃く含み高い美意識に則ったもので、広く読者の支持を得ている。

²⁾傅孟麗『茱萸的孩子：余光中伝』（天下遠流出版、1999）、「序文」

³⁾焦桐「台湾心和中国結」、『結網与詩風—余光中先生七十寿慶論文集』（九歌出版社、1999）所収。

⁴⁾新詩（民国期以後の中国白話文の詩）と異邦体験については拙論「台湾現代詩論—楊牧における郷土の風景—（上）（下）」『野草』第67号、第68号（2001年3月、8月）で触れている。

⁵⁾以下のように濃厚な郷愁意識とリフレインを多用した作品である。「長江の水をひとすくください 長江の水／お酒のような長江の水／酔いしれるようなその味は／ふるさとの味／長江の水をひとすくください 長江の水／海棠の赤い花をください 海棠の赤い花／血のように赤い海棠の花／血が沸き立つほどの焼ける痛みは／ふるさとおもう痛み／海棠の赤い花をください 海棠の赤い花／（以下略）」なお本稿での詩編の翻訳は特に記さない場合は筆者によるものである。余光中詩篇は『余光中詩選』（洪範書店、1981）、『余光中詩選第二巻』（洪範書店、1998）を参照。それ以外の詩篇は、別途、文献を記した。

く、めずらしいものではない。李白は「挙頭望名月、低頭思故郷」（「静夜思」）と月を眺めて故郷をなつかしみ、賀知章は「少小離家老大回、郷音無改鬢毛衰」（「回郷偶書」）と若い時に離れた故郷にもどると、故郷のなまりは同じだったが自分は老いてしまった、と詠んだ。現代詩人余光中は五十年代から六十年代にかけて滞在した異邦アメリカを以下のように描く。「アメリカに行くと、胃には冷たいミルクにイチゴジャム。肺には新大陸の秋。髪には、ロッキー山脈の風。」そして「カレンダーには、清明、端午、中秋、重陽の節句はなく、イースター、感謝祭、クリスマスである。」傅孟麗の表現によると、「碧眼、金髪の学生の前で、彼が英語で古代の中国文学を詠じて、『遙隣小兒女、未解憶長安（遠い故郷の子供達は、この長安を思いやることも知らない）』とを感じる彼であった」⁶⁾余光中にとってアメリカでの滞在は実際の西洋近代国家との最初の出会いであった。それは自らの「家」を失った「中国人」が過去の偉大な中華文明への矜持をもちながら、繁栄を享受する西洋において尊厳を保とうとした時間であった。⁷⁾ 当時を振り返って彼はこう言う。「[当時]アメリカ人はまったく台湾がどこにあるか知らなかった。また遥かな距離を隔ててみると、孤立している台湾がはっきり見えた。大陸は祖国のようでもあり、また敵国のようでもあった。中華文化への情熱をかたく抱きしめようとする私の渴望はさらに強烈になった。しかし実際のところは、当時の私は[作品の]芸術性はまだ未熟であったし、当時の複雑に湧き上がってくる情感に対するには不足していた。」⁸⁾

余光中の郷土への想いはアメリカという合理性を極限に追求する近代社会との出会いをきっかけに生まれ、自らが失ったものがなにかを真摯に凝視するなかで次第に強まっていた。さらに七十年代の香港体験を経て、詩人、散文家として開花した余光中は多様な作品を発表していく。特にその郷愁や家郷へのおもいの強い作品は華文学として広くアジアで支持されていった。

余光中の「望郷」は単に中国大陆がなつかしいという視点で描かれてはいない。それは台湾、中国、東南アジアでひろくその著書が出版され読まれていることから想像されることである。たとえばもうひとりの台湾の詩人、洛夫が七十年代に香港の落馬州から中国を眺めたときの作品と比較してみよう。「望遠鏡のなかで数十倍に拡大された郷愁／風のなかでみだれる髪／距離が合い心臓が早鐘を打ち始めたとき／遠くの山が真正面に私の顔に飛び込んで／ぶつかってきた／ひどく傷ついた自分がいた」（「国境で故

⁶⁾ 前掲『茱萸的孩子：余光中伝』、143頁。

⁷⁾ 余光中はアメリカに三度滞在している。（1958－59、1964－66、1969－71）最初は留学生として、以降は大学の客員教授として中国文学を講じていた。

⁸⁾ 前掲『茱萸的孩子：余光中伝』、72頁。

郷を望む」)⁹⁾

離れてしまった故郷に向かうとき、人はおちつかず過去のいたみがよみがえることがあるが、まして体制の替わった国となればなおさらである。洛夫のこの作品には政治に翻弄される痛切な現実感覚がある。余作品の対象への距離をおいた姿勢とはちがう切実性があり、現実の中国の山や河とつながろうとする詩人の願いがある。

また台湾の本省籍の詩人にとっては、「祖国」は複雑な様相を呈していた。「大東亜戦争」がおわり、台湾から統治者である日本人が撤収していった後、台湾の文学者に「祖国」の中国に対する期待がもたれたのも事実である。

台湾の新竹出身の詩人で、日本に留学した経験もある周徳三の作品。「(前略)／世界は徐々に光明をもち／台湾も光復される／台湾もまた祖国のふところにもどっていく／私は捨てられた唇を前にほほえむのだ」(「祝台湾光復」)¹⁰⁾

台湾が「祖国」に「光復」する旧植民地の詩人の期待が素直に表現されている。しかし、その後の二二八事件、国民党政府の白色テロなどを経て、複雑な国際社会の現実が、大陸からの外省系居住者にも台湾省籍の人たちのあいだにも認識されていく。

余光中の郷愁の対象は洛夫のように現実の大陸の地でもなく、もちろん戦後初期の台湾本省詩人のような新中国への期待でもない。この点を過去の余光中研究を俯瞰しながら、さらに考察する。

2. 余光中作品の評価

余光中作品の一般的評価として、以下のようなものがある。

「[生老病死、戦争愛情など] どのように題材が広がっていても、どのようにその手法が変わっても、彼は基本的に抒情詩人であり、ひとりの中国知識分子の国へのその時代の思いを書いている。」¹¹⁾あるいは、李元洛は、余光中の「郷愁」、「郷愁四韻」を代表として引用し、「三十年以上台湾海峡の波浪は閉鎖されているが、海外遊子の母を恋慕する心と彼らの雲のように飛来する望郷の歌声をおさえつけることはできない」として、その大陸への望郷心を強調している。¹²⁾

さらに彼の政治的立場に関しての評価も挙げておく。詩人、評論家の李敏勇は、「余光中が[世情の]変化に対してうまいのは、その詩人としての生涯に現れており、まさに凹凸無比である。」として、異なる状況で考えがよく変わる人だと言う。また「[他の]作家を考察するときには、明確な美学も倫理の主軸もない」と厳しい評価をしてい

⁹⁾『台湾現代詩集』(林水福編、是永駿編訳、上田哲二訳、国書刊行会、2002)、66頁。

¹⁰⁾李敏勇『台湾戦後文学反思』(自立晚報社文化出版部、1994)、104頁。

¹¹⁾黄維樑「礼賛木綿樹と控訴大煙窓」『璀璨的五采筆』(黄緯樑編、九歌出版社、1994)、186頁。

¹²⁾李元洛「海外遊子の恋歌」、前掲『璀璨的五采筆』所収、125頁。

る。¹³⁾

確かに「変化」という面から余光中の作風を俯瞰すると、おそらく台湾現代詩人のなかでもっとも機を見るに敏な作家である。一九五五年頃にそれまでの格律詩から現代主義に作風が変わり、六〇年代にはすでに「横の移植」（あらゆる西洋の詩を受容し実験すること）をスローガンにしていた現代主義の詩壇に別れを告げ、いわゆる新古典主義の作品を出しはじめている。その後は自由に手法を使い分け読者の支持も失わずに旺盛な作家生活を続けている。

陳芳明の解釈によると¹⁴⁾、戦後の国民党の反共政策時期の文学状況は、「官方文学」と「民間文学」に分けられ、前者は「中華民族主義」の作家で政府の反共文芸政策を受入れたのであり、後者の「中華民族主義」を拒否するものは、台湾社会の生活に題材を採って創作した、という。個々の作家について明言されてはいないが、少なくともある時期の余光中は中華民族主義者であり、当局の意向に沿った文学者と考えられるのであろう。¹⁵⁾ただ、中国的事象を郷愁の対象として、作品の芸術性を高めるための題材として採りあげることと、作家自身が「中華民族主義者」であることとはもちろん別の事象である。特に、外省人作家たちは自らの属していた共同体が根底から変化し、台湾という土地で一種のエミгранトとして出発した経緯もあり、その政治的立場の可否は議論の分かれるところである。

また、以上紹介した過去の評論家諸氏の指摘、つまり余光中作品への支持は「中国知識分子」が離れてしまった「祖国」への望郷を表現することによって得られたものであるという点について、本論は疑義をもつ。

まず、離れてしまった「祖国」への望郷だけであるならば、彼の長期にわたる作家生命とその作品の普遍性が説明しがたい。この背景を明らかにするために、余光中の「中国」がどのような位相でその作品に登場するかを考える必要がある。

3. 余光中と想像の「中国」

余光中における「中国」、あるいは渡台後の記憶がどのような表象をもって作品で表現されているかを作品例に即して考える。

散文集『記憶像鉄軌一樣長（記憶は汽車の軌道のように長い）』では、大陸での少年時代を回想し、「なぜかわからないが、若いころの私は遠方への旅行をいつも願ってお

¹³⁾ 前掲『台湾戦後文学反思』、52 頁。

¹⁴⁾ 陳芳明「台湾新文学史」、『聯合文学』（1999、8）、164 頁。

¹⁵⁾ 例えば、1988 年に余光中が高雄での蔣経国總統の追悼会で発表した作品「送別」（前掲『台湾戦後文学反思』54 頁所収）は詩人の柔軟な政治姿勢が感じられる好個の例である。「悲哀の後ろ姿／疲弊した後ろ姿／はもう振り向かない／／悲しみの靈柩車／別れの靈柩車／は緩やかに進む／／親愛なる友人／辛苦の指導者／がゆっくりと行く」

り、もっともロマン的な旅行のしかたは汽車に乗るそれであった。」という。¹⁶⁾あるいは、それは真珠の首飾りのようでもあった。「記憶の隅のあちこちに転がって散っている／大切な半生の日々／決してとりもどすことはできない／あの宝石店の娘が微笑みながら、／私たちの前で青磁の盤に載せて、訊ねた／「この十八寸のものでよろしゅうございますか」／そんな風にして、三十年の歳月が繋がっていった」（「真珠の首飾り」）

記憶に残った過去は不可逆な時間の痕跡として思い起こすものであり、とりもどそうとする対象ではない。汽車の軌道のようにまっすぐに後ろに過ぎ去ったものであり、記憶のなかでふりかえるだけである。その意味で余光中にとって郷愁の対象はおもいおこすための不可逆な想像のなかの「向こう側」である。あたかもそれは、母親の胎内に回歸するかのようなイメージである。「（前略）昨夜／月光が海のうえに金色の路を伸ばし／ぼくの夢を大陸へもどした／淡い月光の下で／薄い顔色の老母をわずかに見たようだ／ぼくは狂ったように走っていった」（「船人の悲歌」）

処女詩集（『舟子の悲歌』）のタイトルになったこの作品では、一夜の夢で月光の下に伸びた海上の路はまっすぐに母へと向かう。余光中の当初の大きな作品主題は前述したようにアメリカ滞在以降、生まれ故郷に「帰ろうとしても帰れない」という現実の冷戦下の国際状況から生み出された閉塞感からのものである。しかし、七十年代の香港滞在での現実の「新中国」との出会いによって、その主題はより重層化したイメージとなる。

余光中にとって「郷愁」とは、幼いころの小さな切手であり、成長してからは船の切符、そしてやがて母親の小さな墳墓となる。そして今、郷愁は目の前の小さな海峡である。（「郷愁」）小さいころの郵便の「切手」という実在性は、船の切符となり、母の墳墓という記号性となり、越すことのできない海峡という政治的区画の向こう側の想像としての祖国となる。過去の現実とは遠ざかり、想像としての「向こう側」はすでに喪失した過去である。

国家が恣意的に形成されたものであるように、「民族」というものも歴史的に醸成されることはすでに指摘されている。一般的に「民族とは特定の土地をその領土として共有する人間集団である」という考えに従うならば¹⁷⁾、余光中作品の語りの主体にとって語るべき「祖国」の土地は、もはやその共同体基盤としての機能をもたない過去の実在である。それは他の作品にも反映している。

「私が死ぬとき」（「当我死時」）では、詩中の語り手は、みづからが死去したあとは、長江と黄河の間の大地に埋葬されることをねがう。そして、その中国の大地の「伝説で

¹⁶⁾ 余光中『記憶像鉄軌一様長（記憶は汽車の軌道のように長い）』（洪範書店、1987）、129頁。

¹⁷⁾ 関嶺野『民族とは何か』（講談社、2001）、12頁。

は、北方に民歌があり／黄河の肺活量があるものだけがうたえるという／青海から黄海まで／風も聞く」（「民歌」）。大陸の巨大な自然と荒涼たる自然を描くが、同時にどこか死の静寂がある。＜中国＞という母性のイメージとそれに付随する＜死＞の予感にあるのは、すでに喪失したものへの挽歌ともいうべきものである。

以上の例から中国の余光中研究者が指摘する「離れてしまった祖国」への望郷という解釈は、かなり皮相的なものであるといえよう。余光中が郷愁を感じるのは離れてしまった大陸ではなく、少なくともすでに喪失した事象である。

4. 近代への問いかけ

＜死＞を考えると、惹起される時代は、戦後の台湾である。大衆の身体が文字どおり白色テロによって抑圧された歴史である。同時に「中華民国」の擬制のもとで、国家への献身忠誠と儒教道徳が賛美された。余光中はまさにその生々しい現実を生き抜いている作家である。しかし、その台湾の戦後の現実はその作品のなかでは希薄である。なぜならば反共政策の下、輸出経済の活性化のために突き進んできた戦後の台湾にないものへのまなざしこそ余光中の主題であったからである。この点で台湾本省籍の詩人とやや異なる点である。

戦前は日本人として南方の戦争に参加し、戦後は「笠」詩社の創設者のひとりとして活躍する詩人、陳千武の作品がある。「もうすぐ満一歳の女の子は／負けいくさをした／羞恥のない党や国が台湾を占拠したりする理由は／当然知りもしない／利欲が人の心を惑わせた半世紀／恐怖から覚めやらぬかたくなさ／いまなお、「独立」と言える勇気がまったくない」（「私の孫娘」）国家と日常の個人とのかかわりが、気負いもなく明晰に表現されて、幻想も誇張もない観察眼が存在している。自分の住む現在の台湾へのおもいが素直に込められた作品であり、現実の政治が身近なテーマとして、自分の孫娘をとおして捉えられ、読者は波乱の歴史を生きた詩人の透徹したまなざしに共感が感じられる。

余光中のまなざしは同じように、妻や家族など周囲の人間に対するつながりを重視するが、国家としての現実の中国や戦後の台湾の政治との関係性は薄い。むしろ国家という枠組みから自由になることを望んでいる。

例えば、ベトナムでの戦火が激しい1966年の作品、「ダブルベッド」で余光中は＜個＞としての自分のありようを、このように表現している。「戦争はダブルベッドの外でしてもらおう／君のその長い傾斜に横たわって／ぼくはホテルのような流れ弾がヒューと音をたてていくのを聞いている」ここには、国家のためである前に人間であろうとするてらいのない欲求がある。また、「中国、中国、おまえは弁髪なのだ／商標と同じで、俺

の背後にぶら下がっている」（「敲打楽」）と、余光中が書くとき、それは国家や民族の象徴によって固定される＜個＞としてのいらだちがある。台湾では外省系作家とよばれる作家が、大陸をおとずれたときには「歓迎、台湾詩人」となる現実がある。国境線によってラベルが異なる現実のなかで近代人が喪失したものへのおもいがある。我々は、「中国人」、「台湾人」であるまえに＜人間＞であると叫んでいるのである。確かに戦後、反共文学が奨励された時代に「中華民国」台湾省の外省人たちは国境の向こうにすでに喪失した「中国」を作り上げ、台湾のなかで「想像」ではなく「幻想」の共同体を作り上げてきた。しかし台湾の民主化が進み、人の交流が進むとともに現実が幻想を打ち砕いたときに、本来の「人間」としてのありかたを追求する余光中の姿勢は多くの共感を呼んだといえる。公的なわく組みの前に、人間であろうとする余光中の確固とした信念はたとえば、「秦の兵馬俑」ではこう表現されている。「もし今、眼を突然開けば、その威厳は閃き／その髭は猛々しく、獐猛に跳ねあがり／おどろいた観衆はどのように逃げればいだろう／幸い、あなたはまだ両眼を閉じ、あたかも／長年の暗処の幽閉に慣れているかのよう」この作品は中華文明を礼賛しているのではなく、遺物としての兵馬俑、つまり＜中国＞の概念もなく、君主への忠孝を軸とした時代の兵士がもっている完全なる身体性と、それに対峙する現代人の希薄な存在感との対比である。科学を武器に文明の進歩を信じてきた近代人が古代の武装兵に比べてどれだけ幸福になったかという問いかけが出されている。人間の寿命は延びたかもしれないが失ったものも大きいと詩人は叫んでいる。

台湾の政治的民主化の流れと作家の創作活動という視点からみると、余光中の創作上においても変化が現れている。詩集『白玉苦瓜』（1974）と『与永恒拔河』（1979）で中国に関する題材が最も多く、やがて八〇年代初期から台湾に関連したテーマが増えていく。この時期の詩人にとっての一番大きな環境の変化として、1974年から85年までの香港時代がある。¹⁸⁾実際に大陸中国に接する窓口である香港で一家そろって生活しながらの時期、彼の視線は「幻景」、「郵票」、「隔水観音」などの作品で離れてきた第二の故郷、台湾を題材にする。特に、1980年に一時帰国しての最初の作品、「アモイ街の路地」（「厦門街の巷子」）は、現実の生々しい国際社会の激動を反映して、興味深い。最後の聯を引用する。

「アモイ街の路地」

（最終聯）

¹⁸⁾余光中は1974年から85年まで、香港中文大學中文系教授。香港時代については、以下に詳しい。流沙河「詩人余光中の香港時期」（前掲『璀璨的五采筆』所収）

これがすべて、所謂「家」じゃないのか？
外の世界がすべて覆ったとき——
南ベトナムが滅び、パーレビが死んだ
唐山が壊滅し中国が瘦せた
太った暴君が水晶の棺に入り
四人組が新しい牛小屋にうずくまった時
ただ、このひっそりとした九月の路地だけが残った
熟れた秋の陽に半ば醒め半ばまどろんでいる
ぼくにゆったりと、この路地を歩かせてほしい
虫が草むらに戻るように、魚が水底に潜るように
たとえ今この時、ぼくが
秋風に一千の紅旗がはためいている江南にもどったとしても
いったい何人の老人が災難を生き延びて
運河の小さな石橋にもたれて
ぼくが帰るのを待っているだろう？
ぼくが見知らぬ家に帰って夕飯を食べるのを？

台北の通り、厦門街での若き日の自分自身との会話から始まるこの作品は、かつての抒情性を重視した作品から比べると、より叙事性が高く、「太った暴君」といった熾烈な形容詞が出てくる。文革で荒れた大陸と若い時の懐かしい台北の路地の記憶が対比され、「このひっそりとした九月の路地だけが残った」と詩人はいう。権勢を誇る要人が没落し、新しい権力がさらに登場する国際社会で政治に翻弄される人々がいる。しかし、台北の狭い路地では今も「小さな雑貨屋の瘦せた婦人が／隣家の親しそうな昔の笑顔でぼくを迎える」（第三聯）。古い写真が昔の停止した時間をそのまま保存するように、どこかに変わらない世界がある。おそらく見果てぬ夢かもしれないが、誰もがそのような静かな帰るべき場所を心に秘めている。余光中にとって「アモイ街」は失われた彼の<中国>である。

生身の人間として国家の枠組みから解放されて生きたいという宣言は、以下のように周囲の家族との関係で表現されている。

旅先で妻と一瞬、はぐれてしまったときを描いた「東京新宿駅」という作品がある。「見えなくなった、ぼくの旅の連れ／彼女は遠くからずっと付きそっている／記憶が霧のようにはじまる最初の駅から／三十年、どれだけのプラットフォームだったか？／ある処は灯火が燦然と輝き、ある処は物寂しく／ぜんぶは覚えていないが、ただ／車窓に

彼女のシルエットがあれば／荒れ果てた灯や駅でもあたたかく感じるのだった」

ここには、地理的な国家にたいする思いいれよりも、身近な妻や家族とのつながりを大切にする赤裸々なく私>がいる。作者にとって、<私>をめぐる家族との絆を中心とする共同体が強く前面にうちだされている。

以上述べてきた余光中の時間とともに失われた過去の記憶へのこだわり、強い<個>であることの執着、失われた共同体へのおもいは近代化のなかで失われていった人間らしさのありようへの郷愁から生まれたものである。

5. 結語

余光中の郷土の位相を考察するために、記憶のなかの失われた中国的イメージ、家族へのおもい（「真珠の首かざり」、「東京新宿駅」）や亡くなった母への憧憬、個として自由に生きるあこがれ、イエ集団を中心として強い絆で生活を維持する共同体への強い肯定（「アモイ街の路地」）について指摘した。台湾文学における八十年代からの台湾意識、あるいは七十年代の郷土文学の底流にも都市化の波に洗われる村落共同体の崩壊への危惧があった。つまり圧倒的な勢力でアジアを席捲してきた西洋近代へのアンチテーゼとしての言説の系譜に余光中もつながっている。

西洋の国民国家が人民革命による君主制の打倒によって内発的に生まれたのに対して、アジアの近代国家は十九世紀の西洋列強のアジア進出との桎梏のなかでうまれた。日本語で<近代化>や<現代化>とあいまいな定義で呼ばれ、あるいは華文で<現代化>とよばれる modernization なるものは、西洋という他者がもたらしたものであり、しかもアジアはおそらくそれを自分たちのものにすることはできないであろうという予感が余作品にはある。¹⁹⁾なぜなら、西洋という<普遍>を受け入れたアジアは、その時点で西洋というスタティックではない有機的に変わりつづける基準を追いかけることを受け入れたのである。その意味で余光中の作品には二十一世紀においても、けっしてアジアは<普遍>としての世界基準にはなれないであろう、という痛切な自覚がある。そして近代以前の「アジアがそれ自身として自足していた時代」への憧憬がある。²⁰⁾過去百年間の台湾の歴史を俯瞰しても、その「近代性の起点は日本の殖民統治」であり「日本の殖民政権に

¹⁹⁾ 英語の“modernization”を日本語では「近代化」や「現代化」とよび、華語では「現代化」という。中国大陸では、人民政府成立以前の民国期の文学を「現代文学」とよび、以後を「当代文学」とよぶ。また口語自由律の詩は「現代詩」「現代漢詩」（あるいは「新詩」）である。

²⁰⁾ 近代国家の国民の概念は啓蒙主義と革命が神授の王朝秩序の正統性を破壊した時代に生まれ、主権的なものとして想像される、という定義にしたがえば（ベネディクト・アンダーソン『想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』白石さや、白石隆訳、N T T出版、1997、pp. 24—26）、近年まで独裁政権が続いていた多くのアジアの国々の国民はもとより、天皇を頂点として「神の国」であった敗戦以前の日本の「臣民」も「近代」的な国民という枠組みからはみ出ることになる。

よる近代教育体制と過程を通じて、台湾人は近代世界に接触した」²¹⁾という経緯が存在し、モダン／近代性の受容をめぐる問題はこれからも、台湾知識人の課題として存在するだろう。余光中がハスや白玉の美しさをうたい、台湾生まれの詩人楊牧が伝説の先住民の村を憧憬し、かつての日本浪漫派が京都や奈良の美を執拗に賛美したのも、けっして自分たちのものではないmodernizationによって失われたものを取りもどそうとする視点を共有している。アジアのナショナリストにとって近代化とは西洋列強がもたらした他者であり、逆にアジアの内なる「前近代性」を指弾する論者にとっても普遍的近代とは永遠にアジアに達成されることのない幻想である。

以上、余光中作品におけるいわゆる「中国」への郷愁は年少時の大陸への思いもあるが、その基層には西洋近代によって喪失させられた、あるいはそのように想像される「失われたアジア」としての共同体への想いが垣間みえることを論述した。

主要参考文献

- 余光中『余光中詩選』洪範書店 1981
 余光中『余光中詩選第二卷』洪範書店 1998
 余光中『記憶像鉄軌一様長』洪範書店 1987
 『璀璨的五采筆』黃緯樑編 九歌出版社 1994
 『結網与詩風—余光中先生七十寿慶論文集』蘇其康主編 九歌出版社 1999
 『台湾現代詩集』林水福編 是永駿編訳 上田哲二訳 国書刊行会 2002
 傅孟麗『茱萸的孩子：余光中伝』天下遠流出版 1999
 李敏勇『台湾戦後文学反思』自立晚報社文化出版部 1994
 関曠野『民族とは何か』講談社 2001
 ベネディクト・アンダーソン『想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』白石さや 白石隆訳 NTT出版 1997
 陳芳明「台湾新文学史」『聯合文学』1999. 8
 吳乃徳「近代性を求めて：台湾研究について考えること」（日本台湾学会第三回学術大会記念講演）『日本台湾学会報』第四号 2002. 7

²¹⁾ 吳乃徳「近代性を求めて：台湾研究について考えること」（日本台湾学会第三回学術大会記念講演）、『日本台湾学会報』第四号（2002／7）、146頁。